多文化社会学研究科博士後期課程の基本構想

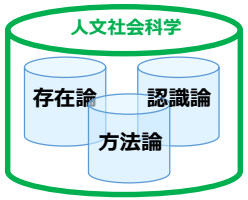
設置時期	**２０２０年　４月**
研究科・専攻名	**多文化社会学研究科　多文化社会学専攻（博士後期課程）　Graduate School of Global Humanities and Social Sciences**
概要	長崎大学は平成30年４月に多文化社会学研究科修士課程を設置し，21世紀の「多文化社会的状況」――文化と，政治・経済・社会・科学・技術などの諸現象とが錯綜するなかで，社会の諸問題は超域的に形成されており，既存の学問的分業では十分に対応しきれていない状況――への取り組みとして，**「多文化社会的状況」における以下①～⑤の諸問題の「発見・説明・予測・解決の道筋の提示」に取り組むことのできる人材を育成している。**特に，「学問のエレメンツ」（基盤必修科目群）では，人文社会科学の概念や理論を学問の土台的基礎（存在論・認識論・方法論）に位置付け直し，各方法論の射程と限界の批判的検討を試みる。これにより修得した多文化社会学の超域的かつ俯瞰的な体系知に基づいて，「学問のプラクティス」（①～⑤の諸問題に対応する形で設けた科目群）では，各学問領域の専門性の養成を行っている。 ①民族，宗教，文化，国家の摩擦や対立とその背景にある存在や意味の多様性に対する否定や反動の問題（**グローバル・スタディーズ科目群**） ②不均衡な資源分配に伴うリスク拡大や，政策・制度・規範と人間の安全保障に関わる問題（**政策科学科目群**） ③日本・アジアと世界の交叉・輻輳のなかで生じる歴史・文化・社会の問題（**環海日本長崎学・アジア研究科目群**） ④コミュニケーションの発話行為を通じた意味創出やルール革新等，言語が現実構成の基盤にあることの理解の欠如に関わる問題（**言語多様性科目群**） ⑤軍縮・不拡散が未完のプロジェクトであることで生じる人道，安全保障，経済面等の問題（**核軍縮・不拡散科目群**） ※括弧内は多文化社会学研究科修士課程における科目群名 本研究科博士後期課程では，修士課程で身につけた多文化社会学の「学問のエレメンツ」と「学問のプラクティス」の統合と展開を更に進め，多文化社会学の更なる高度化と専門化をより一層図ることで，**研究者として自立できる独創的な知見と能力及び高度に専門的な職業に従事できる卓越した能力を養成**する。すなわち，多文化社会学の更なる高度化では，多様性を前提にして，異なる文化や社会との交流からグローバルとローカルの接続を図り，世界を俯瞰的に捉えると同時に，生命，精神，社会文化への関心を有するディシプリンを糾合して，人文社会科学系の学際的な総合研究領域の確立が目指される。その上で，**「多文化社会的状況」における複雑な諸問題の「問題本質の見極め」と「問題解決に向けた多様な解の提示」を目指し，21世紀の学問に求められる価値の創生と普及及び生命，精神，社会文化の持続可能な世界の構築に資する，国際的発信能力を備えた研究者及び高度専門職業人等を養成**する。
学位名称	**博士（学術）　（英語表記　Doctor of Philosophy）** 【根拠】21世紀の世界が直面している諸問題を，既成の学問的分業から総合的，俯瞰的にとらえることは難しい。本研究科博士後期課程では，学際的な多文化社会学の更なる高度化と専門化を図るなかで，21世紀の諸問題の「問題本質の見極め」と「問題解決に向けた多様な解の提示」に必要な能力を更に深化させる。この**学際的な学知とスキルを修得した者に対しては，博士「学術」の学位名称を授与**するのが適切と考える。
入学定員	**３名** 【根拠】　・平成30年４月開設の大学院**多文化社会学研究科修士課程からの進学者** ・他の人文社会科学系大学院修士課程修了者 ・社会と文化，日本・長崎・アジア，言語・コミュニケーション，公共政策，核兵器廃絶・平和に関心を持つ**留学生，社会人**

既設の修士課程からの進学の流れ

博士前期課程（修士課程）

●多文化社会学研究科修士課程
【1専攻】多文化社会学専攻

学問のエレメンツ（基盤必修科目群）



人文社会科学の概念や理論を，学問の土台的基礎（存在論・認識論・方法論）に位置付け直し，各方法論の射程と限界を批判的に検討

多文化社会学の深化と修得
専門知の超域的活用の受け皿へと深化させ，方法論としての成熟化を図る。多文化社会学の修得を徹底化

徹底的な専門性の養成

学問のプラクティス

グローバル･スタディーズ科目群
人文社会科学の見地から文化的他者への理解と共感に基づき，超域的に知と人を繋ぐことで，民族・宗教・文化・国家の摩擦や対立等にみる存在や意味の多様性に対する否定・反動に対して，専門的解決を図っていく。

言語多様性科目群
言語学の多様性を文法的・音声的特性，文化社会的規則や談話レベルの特性等から捉えることで，コミュニケーションの発話行為を通じた意味創出等，言語が現実構成の基盤にあることへの理解の欠如に関わる問題について専門的解決を図っていく。

環海日本長崎学･アジア研究科目群
人文科学と社会科学の連携に基づく諸観点から，日本・アジアと世界の交叉・輻輳のなかで生じる歴史・文化・社会の問題について専門的解決を図っていく。

政策科学科目群
既存の国際経済学（上からの視点）と地球上で生活する人々の視点（下からの視点）を調和した「世界政策論」を開拓し，政策・制度・規範と人間の安全保障に関わる問題等について専門的解決を図っていく。

核軍縮･不拡散科目群
核軍縮・不拡散分野において人文社会科学系と自然科学系及び研究と実務の両側面を兼ね備える（文理融合）ことで，人道面・安全保障・経済等の問題について専門的解決を図っていく。

※主選択した科目群の科目をメインに履修する。

博士後期課程

●多文化社会学研究科博士後期課程
【1専攻】多文化社会学専攻

5つの系

社会文化研究系
共生の視点に立って，生命，精神，社会文化と，それらに関わる社会，制度，組織，相互行為，構造，機能などの多様性を理解し，世界を，「出来事の生成と消滅の反復」と「出来事の物質化（制度化）」が構成する動的平衡及び差異体系として捉えるなかで，摩擦や衝突を超えた新たな秩序や文化の形成を探究する。

言語研究系
社会の現実と問題が，言語・コミュニケーションから構成されることに基づき，相互理解の原理的解決の可能性を求めて，言語の固有性を，記号内容（意味や意図）と記号形式（音や動作）の統語性や，言語表現の使用による意図の共有から探究する。また，言語の適応的機能に関する思考・生成文法や，コミュニケーションによる社会構築の可能性，コミュニケーションの情報・伝達・理解の選択を支える非言語コミュニケーション及び非記号的コミュニケーションについて探究する。

環海日本長崎学･アジア研究系
従来の日本研究の諸成果を，東アジア及び世界に位置付けなおし，ヒト，モノ，コトの流動のなかにある日本，その１つの拠点としての長崎という視点から，従来の文学部中心の日本研究とは異なる，トランス・ディシプリナリーな「環海日本長崎研究・アジア研究」を探究する。すなわち，オリエンタリズム的認識（自己に対して優越的な意味を付与するために，他者を一段劣った存在として，搾取や救済の対象に据えて構築すること，このような自己中心的な自己ー他者認識が，「他者支配の言説」（ディスコース）に基づく近代学問のあり方に深く根差していること）を，理論・実証を通じて脱構築し，グローバリゼーションによる世界や学問の脱中心化と多中心化に注視しながら，21世紀の人文社会科学の前提となる，新たな自己ー他者関係を探究する。

公共政策研究系
国際公共政策の課題設定と設計，政策形成と決定，政策実施と管理，政策評価を行うために，政策過程の各段階でそれぞれのアクターが演じる役割や限界を理解するとともに，現在の国際関係を批判的に検討し，グローバルな公共的価値の形成と実現を探究する。

核兵器廃絶･平和学系
核抑止力に依存しない安全保障の枠組みや原子力平和利用と核不拡散の関係等について国際情勢を注視しつつ分析・考察し，核軍縮・不拡散に関する専門性の涵養を通じて，核なき世界の形成と実現を探究する。

※学生は，研究領域に応じていずれかの系を選択する。

多文化社会学の超域的･俯瞰的な深化

学部の課題を発展的に継承し，超域的，俯瞰的な〈学〉である多文化社会学の専門性と実践性を更に深めることで，教育や国際機関，グローバル企業や国際記者，文化財関連の専門家などを養成し，変化著しい21世紀社会の更なる要請に応えていく。

- ○ **多文化社会学のプロフェッショナルの育成**
- ○ 多文化社会学における**「学問のエレメンツ」と「学問のプラクティス」の統合と展開を更に高度化**
- ○ **多文化社会学研究科修士課程の「科目群」を継承・発展させた系の編成**

多文化社会学としての集大成

多文化社会学のより一層の高度化を通じて，研究者として自立できる独創的な知見と能力又は高度に専門的な職業に従事できる卓越した能力を養成する。「問題本質を見極める力」と「問題解決に向けた多様な解を提示する力」を深化させ，21世紀の学問に求められる価値の創生と普及及び生命，精神，社会文化の持続可能な世界の構築に資する，国際的発信能力を備えた研究者及び高度専門職業人等を養成する。

多文化社会学研究科博士後期課程の特徴

① 多文化社会学の更なる高度化と専門化を図り，国際的発信能力を備えた研究者及び高度専門職業人等を養成

多文化社会学のなお一層高度化された専門性の修得を通じて，21世紀社会の**「多文化社会的状況」がもたらす諸問題の「問題本質の見極め」と「問題解決に向けた多様な解の提示」に必要な能力を更に深化させ**，その上で，21世紀の学問に求められる価値の創生と普及及び生命，精神，社会文化の持続可能な世界の構築に資する，**国際的発信能力を備えた研究者及び高度専門職業人等を養成**する。

② 長崎・アジアの経験と理論の往還による，地球社会のインター・ローカル・リレーションシップに基づく「世界と地域」の一体的な創生

グローバルとローカルの有機的連関のなかで，**長崎が文化的歴史的にインター・ローカル・リレーションシップの重要な結節点を占める**ことへの自覚に基づきながら，**相即不離の関係にある「世界と地域」の一体的な創生に向けて更なる歩みを進める**。この「世界と地域」の一体的創生のため，後述する5つの研究領域（社会文化研究系，言語研究系，環海日本長崎学・アジア研究系，公共政策研究系及び核兵器廃絶・平和学系）において修得する，多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力に基づき，**21世紀社会の「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「問題本質を見極める力」を持った人材と「問題解決に向けた多様な解を提示する力」を持った人材を養成**する。また，シーボルトが持ち帰った文物が所蔵されているライデン大学や，日本の考古学，歴史，民俗を総合的に研究・展示する国立歴史民俗博物館など，**国内外研究機関との包括連携に基づく教育・研究リソース**をオプションとして**広範囲に渡って活用**する。

③ 被爆地としての歴史的経験や記憶等を背景にした，核兵器廃絶をメインに掲げる国内唯一の研究の場を提供

本学が設置している核兵器廃絶研究センターの教員による研究指導を中心にして，**国内唯一の，核兵器廃絶をメインに掲げた平和に関する理論的実践的研究を実施**する。

多文化社会学研究科博士後期課程の３ポリシー

ディプロマポリシー

21世紀の「多文化社会的状況」における諸問題について，次の（1）から（3）の能力を有していること。

(1)以下のいずれかの研究を行い，多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力
①共生と多様性の理論の確立を目指す社会文化研究
②言語・非言語コミュニケーションを通した相互理解の原理的解決を目指す言語研究
③日本・長崎の視点から，21世紀の人文社会科学の土台となる新たな自己－他者関係を構築するアジア研究
④グローバルな公共的価値を形成する公共政策研究
⑤核兵器廃絶の推進に寄与する平和に関する理論的及び実践的研究

(2)人文社会科学系の再編を通じた多文化社会学の基盤的かつ汎用性を持った知と方法のより一層高度な修得を通じた，「多文化社会的状況」における「問題本質を見極める能力」又は「問題解決に向けた多様な解を提示する能力」

(3)異なる社会の経験と理論を往還し，新たな知と価値を創生するなかで，自立的に研究を遂行することができる卓越した能力又は高度に専門的な職業に従事することができる卓越した能力

カリキュラムポリシー

５つの系から多様な専門分野で構成される研究指導チームが構成され，多角的な視野に基づく研究指導を通じて，多文化社会学の独創的な知見や卓越した能力を修得する。

・基盤的かつ汎用性を持った多文化社会学の，より高度で独創的な知と方法を修得するため，社会文化研究系，言語研究系及び環海日本長崎学・アジア研究系の見地から「多文化社会的状況」への「問題本質を見極める力」の基盤を形成し，公共政策研究系及び核兵器廃絶・平和学系の見地から新たな知と価値の創生につながる「問題解決に向けた多様な解を提示する力」の基盤を形成する講義科目を編成する。

・各自の研究テーマの目的・意義・方法を明確化し，「問題本質を見極める力」又は「問題解決に向けた多様な解を提示する力」の更なる高度化を図るために演習科目を編成する。

・演習科目の履修で得た研究成果に基づき，更なる分析と考察を進めるなかで，博士論文を作成するために研究指導を実施する。

アドミッションポリシー

多文化社会学専攻は，入学者に以下の学力・能力，資質・素養を求める。

・人文社会科学に関する素養と知識を持つ。

・21世紀社会の「多文化社会的状況」――非対称的で不均等な社会の在り方，不均衡な資源分配に伴うリスクの拡大，民族・宗教・文化・国家等の摩擦や対立などが，世界のなお一層の交叉・輻輳をともないつつ，複雑な諸問題を生み出している状況――に対して，理解と共感を深めることができる。

・広く世界のさまざまなバックグラウンドを持つ人々との交流とともに，地球社会の発展と幸福に貢献することに関心を持つ。

修士課程と博士後期課程のディプロマポリシーの比較

修士課程のディプロマポリシー

●多文化社会学研究科修士課程
【1専攻】多文化社会学専攻

次の能力を有していること。

21世紀社会の「多文化社会的状況」における諸問題に対して，文化的他者への理解や共感を第一義に据えて多様な文化や社会，理念や利害を洞察し，自らが有する確かな専門知とともに異なる専門知をも横断的に繋ぎつつ，多文化社会学の超域的かつ俯瞰的な見地から問題の発見・説明・予測・解決に取り組むことができること

博士後期課程のディプロマポリシーは(1)の能力のほかに，博士後期課程で養成する人材に必要な能力である(2)及び(3)の能力の3つの能力で構成。

博士後期課程のディプロマポリシー

●多文化社会学研究科博士後期課程
【1専攻】多文化社会学専攻

21世紀の「多文化社会的状況」における諸問題について，次の（1）から（3）の能力を有していること。

修士課程のディプロマポリシーを継承，発展させる（修士課程で得られた成果を踏まえつつ，その専門性をなお一層深化）

継承・発展

(1) 以下のいずれかの研究を行い，多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力
①共生と多様性の理論の確立を目指す社会文化研究
②言語・非言語コミュニケーションを通した相互理解の原理的解決を目指す言語研究
③日本・長崎の視点から，21世紀の人文社会科学の土台となる新たな自己―他者関係を構築するアジア研究
④グローバルな公共的価値を形成する公共政策研究
⑤核兵器廃絶の推進に寄与する平和に関する理論的及び実践的研究

博士後期課程で養成する人材に必要な能力　※(1)の能力を除く

(2) 人文社会科学系の再編を通じた多文化社会学の基盤的かつ汎用性を持った知と方法のより一層高度な修得を通じた，「多文化社会的状況」における「問題本質を見極める能力」又は「問題解決に向けた多様な解を提示する能力」

(3) 異なる社会の経験と理論を往還し，新たな知と価値を創生するなかで，自立的に研究を遂行することができる卓越した能力又は高度に専門的な職業に従事することができる卓越した能力

学外アドバイザーについて

学外連携機関と連携する研究分野

ライデン大学（オランダ）

日蘭史やジャパノロジーなど日本学・長崎学・アジア研究

国際基督教大学

平和学や公共政策研究分野

国立歴史民俗博物館

社会文化研究や日本学・長崎学・アジア研究において，特に歴史学・民俗学・総合資料学の分野

公益財団法人 東洋文庫

社会文化研究・言語研究や日本学・長崎学・アジア研究において，特に歴史学の分野

学外アドバイザーの役割

- 各学年末に実施される「合同中間発表会」にオブザーバーとして参加する。
- 学位審査委員の副査として，「論文公聴会」での口頭試問や論文審査を行う。
- 適宜，講演者として招き，学生に対して研究内容等の講演を実施する。

学外アドバイザー選出方法

本学（本研究科）と包括連携協定を締結し，学生に対する教育及び研究に関する連携・協力への合意がある機関から選出する。
学外アドバイザーは，原則として，1年次に教授会において研究指導チーム（主指導教員・副指導教員）を決定する際，併せて決定するものとする。
教授会において学外アドバイザーの決定を行う際は，学生の研究テーマと，以下に示す各学外連携機関との連携研究分野及び学外アドバイザー候補者の研究分野を照らし合わせ，学生の研究を推進する上で適任であるかを選出の基準とする。従って，学生の研究テーマによっては，学外アドバイザーを置かない場合もある。また，学生の研究計画の見直し等により，当初の研究テーマに変更が生じた場合，変更後の研究テーマに合致した学外アドバイザーの再選出も可能とする。

多文化社会学研究科博士後期課程カリキュラムマップ

想定される出口

研究者（留学生の母国の大学や研究機関を含む。），グローバルに展開する企業，国際機関，社会人の学びなおし

修了要件：16単位

学生毎の研究指導チームを構築～研究計画の進捗を確認～博士論文審査委員を選定～修了判定まで，入学から学位取得の全プロセスを管理し，教育・研究・学位の質を担保する機能を果たす。

	博士論文審査プロセス	演習科目（12単位・必修）	講義科目（4単位・必修）
D3	博士論文の要旨と審査結果を公表 研究科教授会で学位授与判定 **1~2月**：学位論文審査・最終試験 論文公聴会(公開)の実施 **12月**：博士論文提出 学位審査委員の決定 **9~10月**：博士論文予備審査 **第1Q**：研究計画書の更新	**「研究指導」(4)** 「研究演習Ⅰ」及び「研究演習Ⅱ」で取り組んだ内容を踏まえ，先行研究の読解とその批判的検の成果を更に発展させつつ，**博士（学術）の学位に相応しい論点，方法，分析，考察，論証を有した博士論文を作成**し，**各系でディプロマポリシーにおいて定める能力の獲得**を目指す。	
D2	**第4Q**：研究成果報告書Ⅱの作成 合同中間発表会の実施 少人数体制の指導による，研究進捗に合わせた討論・方法と結果のチェック，実際の論文作成指導 **第1Q**：研究指導チームの見直し 研究計画書の更新	**「研究演習Ⅱ」(4)** **「研究演習Ⅰ」の成果を更に発展**させるなかで，研究指導チームからの助言を踏まえ研究計画を更新し，これに基づき研究を進めていく。資料・データの収集，分析，考察を更に進め，「多文化社会的状況」における**「問題本質を見極める力」又は「問題解決に向けた多様な解を提示する力」の更なる高度化を図る**。成果は「研究成果報告書Ⅱ」にまとめる。	
D1	**第4Q**：研究成果報告書Ⅰの作成 合同中間発表会の実施 少人数体制の指導による，研究進捗に合わせた討論・方法と結果のチェック，実際の論文作成指導 **第1Q**：研究指導チームの構築 研究計画書の作成	**「研究演習Ⅰ」(4)** **主指導教員及び副指導教員からなる研究指導チームからの指導により，持続可能な社会の構築に資する質の高い研究計画を立案し，これに基づき研究を進めていく**。資料・データの収集，分析，考察を行うなかで，「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「問題本質を見極める力」又は「問題解決に向けた多様な解を提示する力」を養う。成果は「研究成果報告書Ⅰ」にまとめる。	**「多文化社会学特論Ⅱ」(2)** 「公共政策研究系」及び「核兵器廃絶・平和学系」の研究領域を中心に**「問題解決に向けた多様な解を提示する力」の基盤を形成** **「多文化社会学特論Ⅰ」(2)** 「社会文化研究系」，「言語研究系」及び「環海日本長崎学・アジア研究系」の研究領域を中心に**「問題本質を見極める力」の基盤を形成**

継続して実施

・メンター制度によるロール・モデル育成
・教員公募書類や研究費の申請書書き方セミナー
・研究成果報告支援

多様なバックグラウンドを持つ学生に対し研究に必要な知識を獲得させるため必要に応じ博士前期課程「学問のエレメンツ科目」の聴講を推奨

想定される入口

多文化社会学研究科修士課程からの進学者，他の人文社会系大学院修士課程修了者，留学生や社会人（社会と文化，日本・長崎・アジア，言語・コミュニケーション，公共政策，核兵器廃絶・平和に関心を持つ）　※長期履修制度の利用可

多文化社会学研究科博士後期課程　研究活動の流れ

D1 → D2 → D3

連携機関・学外アドバイザー　合同中間発表会のオブザーバーや学位論文審査の副査として，研究指導に参画する。（資料６参照）

ライデン大学(オランダ)

国際基督教大学

国立歴史民俗博物館

公益財団法人 東洋文庫

- 学位授与判定
- 論文公聴会の実施
- 博士論文提出
- 予備審査
- 研究計画書の更新
- 合同中間発表会の実施
- 研究成果報告書Ⅱの作成
- 研究計画書の更新
- 合同中間発表会の実施
- 研究成果報告書Ⅰの作成
- 研究計画書の作成
- 研究指導チームの構築（教授会で了承）

研究の進捗状況を定期的に確認することで，論文作成における手戻りを減らし，論文を計画的に作成することが可能となる。また，研究指導チーム間の相互チェック作用も期待できる。

博士(学術)

修士課程で身につけた多文化社会学の「学問のエレメンツ」と「学問のプラクティス」の統合と展開を更に進め，多文化社会学の更なる高度化と専門化をより一層図ることで，研究者として自立できる独創的な知見と能力及び高度に専門的な職業に従事できる卓越した能力を養成する。

<研究指導チーム編成のポイント>

- **主指導教員と副指導教員2名**からなる，**学際的な研究指導チーム**を構築する。
- 副指導教員のうち少なくとも1名を**主指導教員とは異なる系から選出**することで**学際性を担保**。
- 研究計画の見直し等により，研究テーマの変更が生じた場合は適宜，指導体制の見直しを実施。